

先輩インターンの活躍について

派遣年度	2013年度	インターン番号	KB011	タイプ	公募型
派遣国	ミャンマー連邦共和国			派遣都市	ヤンゴン
受入機関	Republic of the Union of Myanmar Federation of Chambers of Commerce and Industry (UMFCCI)				
受入機関概要 (事業内容等)	・ミャンマーの民間企業約3万社が加盟する総合民間経済団体。ミャンマーの民間部門を代表し、政府への政策提案。・ローカル人材の知識・技能習得のための研修の提供。・海外経済団体との共同会議の開催等。				
派遣期間	2013年9月18日～2014年2月28日				
現在の所属先	立命館大学	当時の所属先	同左		
現在の所属部署	国際関係学部	所在地			
区分	学生	性別	男		

1. インターンシップに参加されたきっかけや動機についてお聞かせください。

私は「将来、発展途上国の開発援助に携わりたい」という夢に向け、本インターンシップで自らの能力を高めたいと思って応募しました。高めたかった能力は、①文化をとわず発揮できるリーダーシップ能力と、②将来の開発業界を俯瞰する広い見識です。所属先では、自らがリーダーシップを取って組織の課題を解決する過程を通じて、これらの能力を実践的に身に付けたいと考えていました。

2. インターンシップではどのようなことをされましたか。

派遣先では人材育成部門に所属し、ミャンマー人に向けた研修のサポートを行いました。与えられた業務に加えて、大学生向けの研修の企画立案から実施まで指揮を執りました。会員企業の利益に結びつき、且つ自分の能力も発揮できる分野として提案したところ承認され、結果として25名のミャンマー人大学生に2日間の研修を提供できました。

3. インターンシップに参加して達成できたこと、参加して良かったことは何でしょうか。

参加前に目標としていた、自ら組織の課題を解決することが実行に移せた点が、良かったです。具体的には、大学生向けの研修を実施し、受入先およびミャンマーの人材育成分野に自分だからこそできる付加価値を提供できました。

一方、業務補助業務が中心になり、開発業界に関して以前より広い視野が身に付いたとは言い難いです。その代わりとして、人材育成という開発援助の現場での体験ができ、業務の流れ、可能性や課題への理解が深まった。

また困難を乗り越える柔軟性が身に付きました。例えば、Super Visorの二度の交代により、信頼関係を再構築する必要がありました。同僚に対する細かい気遣いを忘れない、与えられた仕事を全力でこなし可能な限りの付加価値をつける、等の姿勢を徹底してゼロから信頼を勝ち得ていくという経験ができました。



研修受講生の工場見学に同行した際の様子



大学生向け講義の先生と参加者と

4 インターンシップの経験は、その後どう活きましたか。具体的なエピソードを交えて教えてください。

私は現在、日本ミャンマー学生会議(略称IDFC)を設立し、代表として「日ミャンマーの学生自らが交流機会を創る」というビジョンのもと活動しています。2014年12月には、初の会議をヤンゴン大学で開催することができ、日本人学生15名・ミャンマー人学生15名が、1週間生活を共にしながら両国の社会課題を議論しあう場を実現しました。現在も12人の日本人・ミャンマー人混合のチームを率いて、第2回を2015年2月に実施すべく奮闘中です。

すべてのきっかけは、本インターンシップで得た“人との出会い”でした。前ページで記載した大学生向け企画のお礼として、私はミャンマーの3大学に招かれました。そこでミャンマー人学生たちから熱烈的な国際交流へのニーズを聞き、学生会議のアイデアを得たのでした。

アイデアの実現に漕ぎ着ける過程では、いくつもの困難がありました。動かないミャンマー政府からの承認を如何に得るか、両国の学生が共通に興味をもてるプログラムはなにか・・・等々、頭を悩ませました。それらはインターンシップの経験があったからこそ乗り越えられたと思います。同僚との交流で学んだ「ミャンマー文化への深い理解」、リーダーとして大学生向け研修を立ち上げる過程で鍛えられた「柔軟な課題解決力」が特に役に立ちました。結果的に、ミャンマー最高学府であるヤンゴン大学、インターン先のUMFCCIなど、現地機関の理解と賛同を得て、実行に漕ぎ着けました。

来年4月からは日系民間企業で働きます。選択の背景として、同時期に派遣された社会人インターンの方の背中を見て、発展途上国の開発における民間セクターの重要性を感じたこと、そして自分自身がインターンを通して収益化に関して経験不足・アイデア不足を痛感したことがありました。

30歳までにはミャンマーで起業し、お客さんとなるミャンマーの人々、自社の社員、日本とミャンマーの社会、に貢献する「三方良し」の事業を実現したいという夢を描いています。もちろん(ミャンマーでそうであったように)この先の出会いによって新しい夢ができるかもしれませんが、いずれの道に進もうとも、インターンで得た能力を生かしながら社会に求められる事業を自ら生み出していきたいです！

5. 最後に、インターンシップへの参加を検討している人たちへメッセージをお願いします。

学生にとっても短くはない期間です。その期間、日本にいたらできることを犠牲にしなくてははいけません。就職活動のため、それだけの目的なら日本でインターンをしたほうが近道かもしれません。

けれども、総じて私は海外インターンシップへの参加をお勧めします。学生という枠をはずされて自分の無力さを痛感したり、日本と違う文化の違いに苛立ったり、海外インターンシップだからこそ体感できた苦労。そして動き続けたら、最後にちょっと実感できた自分の成長。それらを与えてくれた本インターンシップ事業には本当に感謝しています。少しでも迷っている方には挑戦していただけたらと思います。

現在の活躍の様子



第1回日本ミャンマー学生会議(略称IDFC)の参加者30名と運営メンバー12名と。

「日ミャンマーの学生自らが交流機会を創る」というアイデアが現実になった瞬間でした！